

# ディカーニカ近郷夜話 前篇

VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

ソロチンツイの定期市

青空文庫



家のなかにあるのは退屈だ。

ああ、誰か外へつれだしてお呉れ

娘つ子があそび戯れ

若い衆がうろつきまはる

賑かな賑かなところへと！

——古伝説より——

一

小露西亜の夏の日の夢心地と、その絢爛きらびやかさ！ 鳩羽いろをした果しない蒼空が、エロチックな穹窿となつて大地の上に身をかがめ、眼に見えぬ腕に佳人を抱きしめながら、うつつをぬかしてまどろむかとも思はれる、静けさと酷熱の中に燃える日盛りの、この堪へがたい暑さ！ 空には散り雲ひとつなく、野づらには人声ひとつ聞えず、万象はさながら寂滅したかの如く、ただ頭上たかく天際にをのく雲雀の唄のみが、銀鈴を振るやうに

大氣のきざはしを通つて、愛慾に溺れた大地へ伝はり流れるのと、稀れに鷗の叫びか、甲高い鶉の鳴き声が、曠野にこだまするばかり。樾の木立はものうげに、無心に、まるで当<sup>あ</sup>所<sup>と</sup>なきさすらひ人のやうに、高く雲間に聳えたち、まぶしい陽の光りが絵のやうな青葉のかたまりを赫つと炎え立たせると、その下蔭の葉面<sup>はづら</sup>には闇夜のやうな暗影<sup>かげ</sup>が落ちて、ただ強い風のまにまに黄金いろの斑紋がばらばらと撒りかかる。恰好のいい向日葵<sup>ひまわり</sup>のいつぱい咲き乱れた菜園の上には、翠玉石<sup>エメラルド</sup>いろ、黄玉石<sup>トツパーズ</sup>いろ、青玉石<sup>サファイヤ</sup>いろ等、色さまざまな、微細な羽虫が翔び交ひ、野づらには灰いろの乾草の堆積<sup>やま</sup>や黄金いろの麦束が、野営を布いたやうに、果しもなく遠<sup>をちこち</sup>近に散らばつてゐる。枝もたわわに実のなつた桜<sup>さくら</sup> 桃<sup>もも</sup>や、梅や、林檎や、梨。空と、その澄みきつた鏡である河——誇りに盛りあがつた緑の額縁に嵌まつてゐる河……なんと小露西亞の夏は、情慾と逸樂に充ちあふれてゐることだらう！

ええと、一千八百……一千八百……さうだ、なんでも今から三十年ほど前の、暑い八月の、丁度かうした壮麗な輝やかしい或る夏の日のこと、小都会ソロチンツイの町から十露里ばかり手前の街道筋は、をちこちのあらゆる農村から定期市<sup>ヤールマルカ</sup>を目ざして急ぐ人波で埋まつてゐた。朝まだきから、塩や魚を積んだ荷車の列が蜿蜒として際限もなく続いてゐた。上から乾草をかぶせられた壺の山が、幽閉と暗黒に退屈しきつたともいふやうに、もぞ

もぞと蠢めき、またところどころ、荷車のうへに高く押し立てられた枠わくのあひだからは、  
 けばけばしい模様を描いた井や挿鉢の類が自慢さうに顔をのぞけては、はで好きな連中の  
 物欲しさうな眼まなざし差を牽きつけてゐた。道ゆく人々の多くは、さうした高価な品の持主で  
 ある、背の高い陶器すゑものし師が、自分の商品の後ろからのろしたあしどりで歩みながら、  
 絶えず、伊達者だてしやで蓮葉な陶器どもに、いやがる乾草をかぶせかぶせするのを、羨ましさう  
 に眺めやつた。

一方、少し離れて、麦の袋や苧や麻布や、その他いろんな自家製うちできの品を満載した荷車を、  
 へとへとに疲れた去勢牛に曳かせながら、その後ろから小ぎつぱりした麻布あさの襦ルパーシユカ衣ルパーシユカに、  
 汚れた麻布あさの＊寛袴シヤロワールイを穿いた持主がのつそりのつそり歩いてゐた。彼は、その浅黒  
 い顔から玉をなして流れ、あまつさへ長い泥鱧髭のさきからぽたぽた滴り落ちる汗を、も  
 のうげな手つきで拭き拭き歩をはこんでゐるが、その髭は、幾千年このかた美醜かみおしろいの別ちな  
 くあらゆる人の子をば招かれもせぬのに訪づれる、あの容赦なき調髪師の手で髪かみ白粉おしろいを  
 ふりかけられてゐた。それと並んで、おとなしさうな、年とつた一頭の牝馬が荷車に繋が  
 れてポカポカ歩いてゆく。行きずりの人、とりわけ、たいていな若者が、この百姓と行き  
 交ふ度ごとに必らず帽子をとつた。だが、それはこの親爺の白毛髭のせりでもなければ、

その勿体ぶつたあしどりのせるでもない。さうした敬意の払はれる理由が知りたければ、眼を少し上へあげさへすればよい。荷車の上には丸顔の美しい娘がひとり坐つてゐた。黒いなだらかな三日月眉は澄みきつた栗色の眼の上にもたげられ、薔薇いろの唇には屈託のない微笑が浮かび、頭べにまとはれた赤や青のリボンは、長い編髪くみがみや野花の小束と共に、彼女の蠱惑的な頭べの上に、華やかな王冠のやうに落ちついてゐた。何もかもが彼女の心を惹きつけるらしく、あらゆるものが彼女には珍らしく、目あたらしさうで……その美しい二つの眸は絶え間なく、次ぎから次ぎへと馳せうつつた。どうしてまた夢中にならずにゐられよう！ 初めてのヤールマルカ定期市ゆきなのに！ 十八娘の生まれて初めてのヤールマルカ定期市ゆきなのに……しかし、彼女がどんなに父親にせがんで同行を納得させたかは、行き交ふ人々のうち誰ひとり知つてゐる者がない。もつとも父親は、根性まがりの継母さへるなかつたら、二つ返辞で聴き入れたことだらうが、彼はまるで、永年のあひだこき使はれた挙句のはてに、お払ひ箱になるために、現に曳かれてゆくまうろくうま耄碌馬の手綱を自分が掴んでゐると同様に、すっかりその後添の女房の手で尻尾を押へられてしまつてゐたのだ。そのやかましやの女房かみさんといふのは……。しかしわれわれはその女房かみさんが現在この荷馬車のでつぱんに乗つかつてゐることをつい胸忘れしてゐた。その女房かみさんは、ちやうど、貂の毛皮のや

うに、色こそ赤いが、一面に植毛の施こされた、しやれた青い毛織の短衣コフタの下に、将棋盤  
 みたいな市松模様の、立派な毛織ブラフタ下着を着こみ、更紗模様の頭巾アチーポック帽をかぶつてゐる。そ  
 れが彼女のでつぷりした赤ら顔に一種独特のいかつさを添へて、何かかうひどく不気味で  
 異様な風貌に見えたので、誰しも愕ろきの眼を、急いで陽気な娘の顔へと移さずにはゐら  
 れなかつた。

シヤロワールイ  
 寛袴

土耳其風の寛闊なズボンで、我が国の山袴、かるさんに類するもの。

この一行の行手には早くも\*プシヨール河が見えだして、まだ遠くから、清涼な河風が  
 もう頬を撫でて、それが堪へがたい酷暑の後でひとしほと身に浸みるやうであつた。無造  
 作にばら撒かれたやうに、草地の上に突つ立つた黒筐柳くろはこやなぎや白樺や白楊などの、明暗の  
 青葉を通して、冷気を帯びた、火のやうな閃光がキラキラ輝やきだすと、美女のやうな流  
 れが白銀しろがねの胸廓を燦然と露はして、その上には樹々の青葉が捲毛のやうに艶めかしく垂  
 れてゐた。まばゆいばかりに美しい額や、百合の花かとも見まがふ両の肩や、波うつて垂  
 れてゐる亜麻いろの頭髮かみにかざされた大理石のやうな頸をば妬ましげにうつす鏡の前で、  
 恍惚として驕りあがつた放恣な美女が、果はてしない気紛れにその衣裳を次ぎ次ぎと取り棄て  
 ては著換へるやうに、この河は殆んど年ごとに、四辺の容子を変へ、新らしい水路を選ん

で、さまざまな目新らしい景色で己れを装ほふのである。幾列にもならんだ磨粉場こなひきばの水車が幅の広い河波を掬ひあげては、それを飛沫に碎き、水煙をあげて、苦もなく跳ね飛ばしながら、あたりを聳するばかりの騒音を立ててゐた。われらの馴染みの一行を乗せた荷馬車は、ちやうどこの時、橋に差しかかつて、彼等の眼前には、限りなく麗はしく、さながら無色透明な玻璃板のやうな、雄大な流れが展開したのである。空や、緑と青の森や、人々や、皿小鉢を積んだ荷馬車や、水車場——さうしたすべてのものが逆さまになつて、藍いろの美はしい深淵にうつつて、沈みもせず、足を空さまにして立つたり、歩いたりしてゐる。くだんの美人はこの絶景に見とれて、途々根氣よく頬ばつてゐた向日葵ひまわりの種の殻を吐きだすことも打ち忘れてぼんやりと考へこんでしまつた。と、そのとき、不意に『おんや、娘つ子だよ！』といふ声が彼女の耳を驚ろかした。振りかへつて見ると、橋のうへに一群ひとむれの若者がたたずんでゐて、その中でいちばん垢ぬけのしたみなりで、白い\*スキートカ長上衣に、鼠いろの羊毛皮アストラハンの帽子をかぶつた若者が、両手を腰につがへたまま傍若無人に、通り過ぎようとする一行を眺めてゐた。ゆくりなくも、その日焦のした、とはいへ愉悅に充ちあふれた顔と、こちらをじつと、見すかさうとでもしてゐさうな、燃えるやうな眼にぶつかると、さつきの声は屹度この人の声だつたなと思つて、彼女ははつと顔を伏

せた。『素つ晴らしい娘つ子だぞ!』と、その白い長上衣スエーフトカの若者は、娘から眼もはなさずに言葉をつづけた。『彼女あのこを接吻することが出来さへしたら、おれあ身代ありつたけ投げだしたつて構やしねえぞ。だが、前には悪魔が坐つてやがる!』どつといふ笑ひ声が四方から起つた。しかし、この思ひがけない挨拶は、のつそりのつそり歩を進めてゐる亭主の、粧めかしたてたその配つれあひ偶には、あんまり嬉しくなかつた。女房かみさんの赤い頬は火のやうに赫つと燃え立つて、取つておきの悪罵がこの不屈きな若者の頭から浴せかけられた。

プシヨール河 ドニエールの一支流。

スエーフトカ 小露西亞人の用ゐる長上衣で、上から腰に帯を緊める。

「何だい、この碌でなしの出来そこない野郎め、咽喉でも詰まらせてくたばつてしまやがれ! 汝てめえの親爺のど頭に壺でもぶつかりやあい。氷に滑つてころびくさるがいいんだ、忌々しい外道めが! 地獄へおちて鬼に髻でも焼かれやあがれ、くそつ!」

「どうだい、あの毒づくことは!」と、若者は女房かみさんの顔に眼をみはりながら、思ひがけなく手厳しい矢継ばやの応酬にいささか辟易した形で、「あの海千山千の妖ウエーチマ女の舌は、あんなことを言つて、あれでちつとも痛くはならねえのかなあ!」

「なに、海千山千だと!……」さう言つて、年増の別嬪は喰つてかかつた。「この罰あた

りめが！ 顔でも洗つて出直して来やあがれ！ しゃうのない破落戸野郎め！ 汝のお袋てめえを見たことはないが、どうせ碌でなしに違ひない。親爺も碌でなしなら、叔母も碌でなしにきまつてるだ！ くそつ、海千山千なんて吐かしやあがつて！……何だい、まだ乳臭い二歳野郎の癪に……。」

その時、荷馬車がちやうど橋を渡りきつてしまつたので、その言葉尻はもう聞き取れなかつたが、若者はそれなり鼻をつけてしまふのが業ごふはら腹だつたと見えて、よくも考へないで咄嗟に泥土をひと塊りつかみあげるなり、それを女房かみさんのうしろから投げつけた。それがまた思ひがけなく、うまく命中して、新らしい更紗アチーボツクの頭巾帽がすつかり泥だらけになつたので、無茶な乱暴者たちの哄笑はまたひとしほ大きくなつた。肥つちよのめかしやは赫つといきりたつたが、しかし荷馬車はその時もうよほど遠く距たつてゐたので、女房かみさんはその腹癒もんぢやくに罪もない継娘や、のそのそ歩いてゐる亭主に当り散らした。だが亭主の方は、かうした悶もんぢやく著ちやくにはもう疾の昔から馴れつこになつてゐたので、依怙地に黙りこくつて、いきり立つ女房の取りのぼせた言葉にはまるで取り合はなかつた。それでも女房かみさんの性懲りもない舌の根は、彼等が目ざして来た市まちの近くの、古馴染で教父なづけおやに当つてゐるツイブーリヤといふ哥薩克の家へ到着するまで、ぶつぶつと小やみもなく口の中で呟やきどほ

しだつた。この家の人々と久しぶりに対面して、暫らくその不快な出来ごとを頭から払ひのけた一行は、ヤールマルカ定期市の取沙汰などをしながら、長い道中の後でひと休みした。

## 二

いつたいこのヤールマルカ定期市に何ひとつ無いといふ品があるだらうか！ 車輪くるまに硝子にタール樹脂に煙草、帯革、玉葱、そのほか百姓道具が一式……これでは財布に三十両あつても、市の品いちひと通り買ふことは出来まい。

——小露西亜喜劇より——

諸君は多分、どこかで滝のおちる音を遠くから聞かれたことがあるだらう、あたりは轟々たる水音に震駭されて、不思議な、はつきりしない響きの交錯が旋風のやうに身に迫るのを。実にかの全群集が一つの龐大な怪物となり、その胴体のすべてを以つて広場や狭い

街々を蠢きつつ、叫び、鳴り、はためく田舎の定期市ヤールマルカの渦巻のなかで、一瞬間われわれを捉へるのは、その同じ感じではなからうか？ 喧騒と怒号、牛や羊や豚の啼き声——それらのすべてが混濁して一つの調子外れな音響となるのだ。去勢牛、袋詰、乾草、ジブシイ、皿小鉢、百姓女、葉味麵麩、帽子——すべてがげげばしく、五彩燦爛として、乱脈に、うようよと累なりあひ、入り乱れて、ぱつと眼の前へ押し迫る。声とりどりの話声が互ひに消しあつて、この音響の洪水からは一語として拾ひあげられ、救ひだされる言葉はなく、一句として明瞭に発せられる叫びはなく、ただ商あきんど人どもの手を拍つ音が市場の四方八方から聞えるだけである。荷車が毀され、鉄金具が鳴り、地面へ投げられる板がばたんばたん轟めまひろいて、眩暈めまひを起した頭には方角も何も分らなくなつてしまふのだ。くだんの旅の百姓は、もう長いこと、娘といつしよに、さうした人波のなかに揉まれてゐた。彼は、こちらの荷車に近よるかと思へば、あちらの荷車に手をかけて、いちいち値段を当つて見るのだつた。さうしてゐるあひだにも肚のなかでは、売りさばきを持つて来た十袋の麦と老耄れた牝馬を中心に、とつおいつ思案にかき暮れてゐるのだつた。ところが娘の顔つきでは、麦粉や小麦を積んだ荷車のあひだを潜るやうにしてあちこちと歩きあんまるの餘りうれしくないらしかつた。彼女は、布張りの日除けの下に美々しく吊りさげられた赤い

リボンだの、耳環だの、錫や銅の十字架だの、古銭の頸飾だの方へ行きかけたのだ。しかし、こちらにも彼女の眼を牽きつけるものはいくらでもあつた。彼女をこの上もなく笑はせたのは、ジプシイと百姓とが、痛さに悲鳴をあげながら互ひに手を敲きあつてゐるのや、酔つぱらひの猶太人が女の尻を膝で小突くのや、女の市場商人が唾いみあひながら、罵る相手にざりがに 蝸をつかんで投げつけてゐるのや、大露西亜人モスカリーが片手で自分の山羊髯をしごきながら、片手で……。ところが彼女は不意に、誰かが自分の刺繡ぬひの襦ソローチカ 袷スキートカの袖をひつぱるのに気がついた。振りかへつて見ると、そこには例の白い長上衣スキートカを着た、眼もとのすずしい若者が突つ立つてゐた。彼女はぎくりとした。同時に、今までどんな歓びにもどんな悲しみにも、つひぞ覚えたことのないほど、胸がわくわくと躍りだした。それがまた彼女にはなんともいへぬ好い心持で、いつたい自分はどうしたといふのか、さつぱり理わ由がわからなかつた。

「怖がらなくつてもいいよ、ね、怖がらなくつてもさ！」若者は娘の手をとつて、小声で言つた。「別に俺おれらは、お前めえにいんねんをつけようといふんぢやねえからさ！」

多分、あんたが、別段あたしに悪い言ひがかりをするのでないことは、ほんたうだらうよ。さう美人は胸のなかで思つた。でも変だわ……。屹度この人は悪魔よ！ だつて、

あたし自分でちやんと、いけないとわかつてゐながら……どうしてもこの人から手を引つ込めることが出来ないんだもの。

ふと父親は娘を振りかへつて、何か言はうとしたが、その時、片方から 小麦 といふ声が聞えた。その魔術的な一語を耳にするとともに、父親は知らず知らず、大声で話しあつてゐる二人の商<sup>あきんど</sup>人のそばへ、ふらふらと近よつて行つて、その方へ氣をとられてしまつた彼の注意は、もはや何物を以つてしても引き戻す術がなかつた。さて、その商人どもが語りあつてゐた小麦の話といふのは、かうだ。

## 三

見ろやい、豪気な若い衆ぢやねえか？ あんなのあ、まったく珍らしいや、<sup>シウハ</sup>火酒を<sup>ブラーガ</sup>麦酒のやうにがぶがぶやりをるぜ！

—— \*コトウリヤレフスキイ『エニエーダ』より——

コトウリヤレフスキイ イワン・ペトツローキツチ (1769—1838) ゴーゴリ以前の  
 小露西亞の代表的な作家で小露西亞文学の一時期を画せし人。

「ぢやあお前めえさんは、なんだね、おらたちの小麦がとても旨く捌けねえと思ひなさるだね？」と何処か小さな町からでもやつて来たらしい、風来の町人といった容子の、樹脂タールで汚れて脂じんだ縞シヤロワールイの寛袴シヤロワールイを穿いた男が、もう一人の、ところどころに補布つぎの当つた青い長上衣スキートカを著た、お額でこに大きな瘤のある男に向つて言つた。

「何も考へるがものあねえだよ、おいらあ、なんだて、方に一つもこちとらの小麦が、たとひ一升ぼつきりでも捌けようものなら、この木に繩をかけて、降誕祭まへに屋根にぶらさげる腸詰みてえに、首をおつ縊つて見せるだよ。」

「人を誤魔化さうつたつて駄目なことよ！ それだつて、おいら達より他にやあ、からつきし持ちこんだ者ねあ無えでねえか。」さう、縞シヤロワールイの寛袴シヤロワールイを穿いた男が反駁した。

ふん、勝手に好きなことをほざきあつてろだ、と、この二人の卸売商人の会話を一言半句も聞き漏さずにあつた、くだんの美女の父親は肚のなかで呟やいた。ところが、おいらのところにやあ十袋から持ち合せがあるだに。

「やつぱり、なんだなあ、悪魔の手のかかった場所ぢやあ、飢<sup>かつ</sup>ゑた\*モスカーリから搾り出すほどの儲けもあるこつてねえだて。」と、額に瘤のある男が意味ありげに言つた。

モスカーリ 小露西亞人が大露西亞人のことを侮蔑的によぶ呼称。

「悪魔の手つちふと、それあいつたいなんだね？」さう縞の寛<sup>シヤロワールイ</sup>袴<sup>イ</sup>を穿いた男が聞き咎めた。

「世間でよりより噂さにのぼつてることを聞かねえだかね？」と、額に瘤のある男がじろりと相手の顔へ不機嫌さうな流<sup>ながしめ</sup>眊<sup>め</sup>をくれながら、つづけた。

「はあて！」

「はあてだと、まつたくそれこそ、はあてだて！ ちえつ、あの委員の畜生めが、旦那衆のうちで梅酒を呑みくさつた後で口を拭くことも出来なくなりやあがればいいんだ、こねえな、金輪際、小麦ひとつぶ捌けつこねえ、忌々しい土地を市場にきめやあがつて。そうら、あの壊れかかつた納屋が見えるだろ？ ほら、あすこの山の麓<sup>ねき</sup>のさ。（茲で、ものずきな、くだんの美人の父親は、まるで注意のかたまりにでもなつたやうに、一層間近く二人のそばへにじり寄つた。）あの納屋のなかで、時々、悪魔がわるさをしるので、一度だつてここの定期市<sup>ヤールマルカ</sup>に災難がなくて済んだためしがねえのさ。昨夜<sup>ゆんべ</sup>おそく、郡書記が通

りすがりに、ひよいと見るてえと、かざまど空気窓から豚の鼻づらが戸外そとをのぞいて、ゲエゲエ呻つたちふだよ。それで奴さん、頭から冷水でもぶつかけられたやうに、ぞうつとしたちふこつた。またしても、あの赤い長上衣スチートカがとびだすに違えちげねえだよ！」

「その赤い長上衣スチートカ つてえなあ、いつたいなんだね？」

ここで、われらの注意ぶかい聴き手の髪の毛は逆立つた。ぎよつとして彼が後ろを振りかへると、自分の娘が一人の若者と互ひに抱きあふやうにして、この世の中にどんな長スチー上衣トカがあらうと、てんでそんなものことは念頭にもおかず、何か恋のささやきを交はしながら、静かにたたずんでゐた。それを見ると親爺は恐怖の念も忘れて、又もとの暢気さに立ちかへつた。

「おやおや、おい、若えの！ お前めえよつぽど、じやらつきの名人らしいな！ おいらなんざあ、婚礼のあと四日目になつて、やつと、死んだ嬢あのでヴェーシカを抱きよせることが出来たもんだ、それも、介添役の教父クームが口ぞへをして呉れたればこそぞだ。」

若者は即座に、愛人の父親を御しやすしと見てとると、胸中ひそかに、如何にして彼を懐柔すべきかについて、思案を凝らしはじめた。

「お父とつつあん、お前めえさんはおいらを知りなさるめえが、おいらはひと目でお前めえさんがわか

つただよ。」

「それあ、わかりもしただらうがね。」

「なんなら名前から渾名あだなから、何から何まで、ひとつ言つて見せようか。お前めえさんの名前はソローパイ・チエレキークつていひなさるんだらう。」

「うん、そのソローパイ・チエレキークはおらだよ。」

「まあ、よつく見ておくれよ、このおいらが分らねえのかなあ？」

「うんにや、どうも見憶えがねえだよ。さう言つちやあなんだが、生涯のあひだに会つて来た人間の面相を、いちいち憶えてなんぞゐられるこつてねえからなあ！」

「しやうがねえなあ、ゴロペンコの悴を憶えてをつて貰へねえやうぢやあ！」

「そんなら、お前めえは、あのオフリームの息子けえ？」

「でなくつて誰だといひなさるだね？ 悪魔でもなきやあ、その当人にきまつてらあな。」

そこで、ふたりは帽子をかなぐりすてて、接吻をしはじめたが、われらのゴロペンコの悴は早速その場でこの新らしい友を攻め落さうと決心した。

「ところで、ソローパイのお父とつつあん、そうらね、このとほり、おいらとお前さんの娘さ

んとあ、お互ひに好いた同士になつて、もう一生涯、離れようにも離れられねえ仲になつちやつたんだがね。」

「そいぢやあ、何かい、パラースカ、」と、笑ひながら娘の方へ向きなほつて、チエレキークが言つた。「ほんとに、もう何かい、その、なんだ……よく言ふ、ひとつ草を喰<sup>は</sup>まうつちふやつか！ どうぢや？ 手を拍つことにするだか？ うん、よかつぺえ、それぢやあ、ほやほやの花髻どん、お祝ひに一杯やらかすことにすべいか！」

そこで三人は打ちそろつて、名の通つた市場の料理店へ入つて行つた——それは猶太女の出してゐる天幕店で、そこにはいろんな形の罎に入つた、あらゆる種類、あらゆる年代の酒が夥しくずらりと並んでゐた。

「やあ、いけるいける！ それでこそおいらの氣に入るわい！」チエレキークは、未来の花髻が火酒をなみなみとついで三合の余もはいる大コップを顔の筋ひとつ動かさずに、ぐつと一息に呑みほしぎま、それを粉微塵に叩きわたつたのを、やや酩酊してどろんとした眼で眺めながら、言つた。「どうだい、パラースカ？ えれい花髻を目つけてやつたぞ！ ほうら、見ろやい、なんちふ見事な呑みつぶりだか！……」

やがて彼は娘をつれて、げらげら笑ひながら、よろめく足どりで自分の荷馬車の方へ戻

つて行つたが、当の若者は、小間物を並べた店々——その中にはポルタワ県下でも名高い二つの市、<sup>まち</sup>\*ガデヤーチやミルゴロドから来た商人も混つてゐたが、——それを軒並にひやかしながら、輦引出物として舅や、そのほか然るべき人々に贈るために、洒落れた銅金具つきの、木製のパイプだの、赤い縁に沿うて花模様をおいた手<sup>ハンカチ</sup>巾だの、さては帽子だのを、丹念に探してまはつた。

ガデヤーチ ポルタワ県下の同名の郡の首都で、プシヨール河に臨んだ小都会。

四

たとひ癩でも男としては

女の前へ出たからにや、

世辞の一つも言ふが徳……。

——コトウリヤレフスキイ『エニエイーダ』

より——

「おい、おつかあ、おらあな、娘の髻を目つけて来ただぞ！」

「まあ、この人つたら、けふび髻さがしどころの騒ぎかい！ 馬鹿々々しい！ ほんとにお前さんつたら、よくよくの因果でいつもさうなんだよ！ どの国にけふび、正気の沙汰で髻さがしなんぞに夢中になつてる人があるものか？ そんなことより、ちつとでも早く、麦を売り捌く分別でもしたらどんなもんだね。その上でこそ好い花髻も目つかるともんだよ！ どうせ、また檻樓にくるまつた乞食野郎かなんかだらう、屹度。」

「へ、お生憎さまでて！ どんなえれえ若者だか、ひとめお眼にかけてえもんだ！ 長スネー上衣トカだけでもお前めえの短衣コフタと赤革の靴より高価たかかんべえ。それよりも、火酒シウハの呑みつぶ

りの見事さと来た日にやあ！……おらあ臍の緒を切つてこのかた、顔の筋ひとつ動かさねえで三合の余もある火酒をひと息に呑みほすやうな若者を見たなあ、初めてだよ！」

「あれだよ、この人には、ただもう、呑助か破落戸ぶろつぎでさへありやあ性に合ふんだからね。てつきり、そいつはあの橋の上でいやに妾たちに絡んで来やがった、あのやくぎ者に違ひないよ、でなかつたら、どんなものでも賭けるよ。今まで出喰はさなかつたのが口惜くやしいくらゐさ、ほんとに思ひ知らせてやるんだつたのに。」

「何だと、ヒーヴリヤ、たとへその男であつたにもしろさ、別にやくぎ者つてえわけあね

えでねえか？」

「ちえつ！ やくざ者つてえわけがないなんて！ まあこの人は、なんて頓馬なおたんちんだらう！ 呆れてしまふぢやないか！ あれがやくざ者でないなんて！ お前さんは一体、あの磨粉場こなひきばのそばを通る時に、その間の抜けた眼を何処にくつつけてゐたんかね？ ほんとにこの人つたら、現在目の前で、その嗅煙草だらけの汚ならしい鼻の先でさ、自分の女房が赤恥を搔かされても平氣の平左なんだからね。」

「それかといつて、おいらにやあ、あの男に一点、非の打ちどころがあるやうにも思へねえからよ。何処へ出しても恥かしくねえ立派な若い衆さ！ ただちよつとばかり、お前めえのおたふくづらに泥糞を塗りこくつただけのこつてねえか。」

「ええつ、ほんとにお前さんつていふ人は、ああ言へばかう、かう言へばああと、へらず口ばつかり叩いてさ！ それあ、いつたいたんといふこつたね？ つひぞこれまでにないことぢやないか？ あ、わかつたよ、おほかた何ひとつ商なひもしない癖に、もうどつかで喰ひ酔つて来たんだらう？」

この時、チエレキークはわれながら余計なことを言つたと気がつくと同時に、屹度いきり立つた女房が、瞋恚の爪を剥いて、いきなり頭髪かみのけをひつ掴みに飛びかかつて来るだらう

と思つて、咄嗟に両の腕で頭をかかへた。

どうなと勝手にしやがれ！ と、彼は猛々しく武者振りついて来る女房を避けながら、心の中で呟やいた。 どうといふ理由わけもねえのに、立派な男を断わらにやなんねえだ。 ああ、神様！ なんだつて、罪深いわしどもにこんな不仕合せを下さるだね？ この世の中はこのとほり碌でもねえものだらけなのに、まだその上に、あなた様は嬬あなんてものをつくりお創造になつただ！

## 五

をれるなすずかけ、お前は嫩い。

しよげるな哥薩克、お前も若い！

——小露西亞の小唄——

白い長上衣スキートカを著た若者は、自分の荷馬車の傍に坐つたまま、がやがやとぎわめく周囲ぐるりの人波をぼんやり眺めてゐた。 おだやかに午前と午後を照らしをへて疲れはてた太陽は地

平の彼方に沈んで、まさに暮れなんとする日は蠱惑的に、鮮やかな紅の色をおびた。白い大小の天幕小舎の頂きがほんのりと焔のやうな薔薇いろの光りを受けてまばゆく輝やいてゐた。かさねて立てかけられた夥しい窓枠の硝子が反射し、酒場の卓子のうへに置かれた青い酒罎やさかづきは火のやうな色にかはり、甜瓜まくほうりや西瓜や南瓜の堆積やまが、さながら黄金きんと赤銅の鑄物のやうに見えた。がやがやいふ人声もめつきり少くなり、低くなつて、女商人や、百姓や、ジプシイも今はしやべり疲れて、その舌まはりものろく、懶げであつた。あちこちに焚火の火がちらついて、水団の煮える香ばしい湯気が、ひつそりした通路を流れた。

「何をふさぎこんでるだね、グルイツイコ？」と、背のひよる長い、日焦けのしたジプシイがわれらの若者の肩を叩いて叫んだ。「どうだね、二十留ループリで去勢牛きんぬきを手ばなしちやあ！」  
「手前つちときたら、一にも去勢牛きんぬき、二にも去勢牛きんぬきだ。手前たちやあ、なんかといへば慾得一点ばりで、堅気な人間を誤魔化したり、ぺてんに懸けたりばかりしてやがるんだ。」  
「ちえつ、馬鹿々々しい！ まつたく冗談でなしにお前めえさんどうかしてるよ。自分で花嫁を取りきめておきながら、今更それを後悔してるんぢやないかね？」  
「ううん、おいらはそんな人間たあ訳が違ふ。約束を反古にするやうなことはしねえさ。」

一旦とりきめたこたあ金輪際、へんがへ変改するやうなこたあしねえよ。だが、あのチエレキークのおやぢには良心つてものがねえんだ、半文がどこもねえんだ。約束はしても、気が変わるんだ……。だが、あのおやぢを責めることも出来ねえさ、奴さんは馬鹿で、あれつきりの人間だからなあ。何もかもあの古狸の仕業さ、けふおいらがみんなと一緒に橋のうへでさんざ弥次りとぼしてやつた、あの妖ウエーチマ女の仕業なのさ！ ちえつ、ほんとに、このおいらが皇ツアーリ帝か、それとも偉え大名でもあつたら、先づ何を措いても、おめおめと女の尻にしかれてるやうな痴しれもの者は一人のこらず死刑にしてやるんだが……。」

「ぢやあ、おいらが骨折つて、チエレキークにパラースカを手ばなすことを納得させたら、お前さん去きんぬき勢牛を二十留ループリで譲るだかね？」

グレイツイコは胡散臭さうに相手の顔を眺めた。浅黒いジプシイの顔には邪よこしまで、毒々しくて野卑で、それと同時に横柄な面魂が浮かんでゐた。それをひとめ見た者には、この男の奇怪な心底には只ならぬ魂胆がふつふつと煮えたぎつてゐて、それに対する地上の報いはただ絞首台あるのみだといふことが立ちどころに領かれた。鼻と尖つた頤とのあひだへすつかり陥おちこんで、絶えず毒々しい薄笑ひを浮かべてゐる口許、火のやうにキラキラ光る金壺まなこ、かはるがはる始終その顔にあらはれる、さまざまな謀計や策略の閃めき

——すべてさうしたものが、現にそのとき彼の著けてゐたやうな、一種独特な奇態な服装を要求したかとも思はれた。ちよつとでもさはつたなら、ぼろぼろにくだけてしまひさうな、暗褐色の長上衣カフタン、両の肩へ垂れ下つてゐる苧屑のやうな長い黒髪、日焦けのした素足にぢかにはいた半靴——さうしたものがすべて彼の身について、その人柄を形づくつてゐるやうに見えた。

「それが嘘でさへなければ、二十留ルーブリはおろか、十五留ルーブリでだつて売つてやらあ！」と、なほも相手の肚をさぐるやうな眼つきで、その顔を見つめながら若者は答へた。

「え、十五留ルーブリで？ ようがす！ だが、くれぐれも忘れなさんなよ、きつと十五留ルーブリですぜ！ ぢやあ手附にこの五留あをやつ札を一枚あづけときやせう！」

「よからう、だが、約束をたがへたらどうする？」

「約束をたがへたら、手附はお前さんのものさ！」

「ようし！ ぢやあ手拍ちとしよう！」

「よし来た！」

はい、飛んでもないこつた、うちのロマンが帰つて来ましたよ。これあまた青紫斑あざをこしらへられなきやあなるまいが、ホモさん、あんたにもちと具合が悪いわねえ。

——小露西亜喜劇の中より——

「こつちへいらつしやいな、アフアナシー・イワーノキツチ！ ほら、ここが垣根の低いところだから、足をおかけなさいまし。なに、心配することはありませんよ、うちのお馬鹿さんは大露西亞人モスカリーに何かちよろまかされやしないかと思つて、ここの教父おやぢといつしよに夜どほし荷馬車の見張りに行つてますからさ。」

チエレキークの雷女かみなりによぼう房はかういつて、垣根のそばにぴつたり身を寄せておどおどしてゐる祭司の息子をやさしく元氣づけた。男はいきなり籬のうへに立ち上ると、物凄い、のつぽの妖怪よろしくの体ていで、さてどこへ飛びおりたものかと、目くばりをしながら、暫

らくのあひだためらつてゐたが、やがてのことにバサつと音をたてて曠草ブリヤンのなかへ落つちこちてしまつた。

「まあ大変！ お怪我はなさらなかつたの、もしや頸の骨でも挫きはなさいませんでして？」さう、ヒーヴリヤは氣づかはしさうにしやべり立てた。

「しつ！ なに大丈夫ですよ、大丈夫ですよ、ハヴローニヤ・ニキーフオロヴナ！」と、やをら立ちあがりながら祭司の息子は、痛さうに、囁やくやうな声で答へた。「ただ、蕁い麻らくさに刺されただけですよ、あの亡くなつた祭司長の言ひぐさではないが、この毒蛇まむしみたいな草にね。」

「さあ家のなかへはいりませう、誰もゐやしませんわ。あたしはまたねえ、アフアナージ・イ・イワーノキツチ、あなたがお腫物できか腹痛はらいたで、おかげんでも悪かつたのぢやないかと、お案じしてゐたんですよ。だつて、あんまりお見えにならないんですもの。で、その後おかはりはありませんの？ あなたのお父さんはこの頃ぢゆう随分たくさん、いろいろと収み入いりがおりなさるつてことですよわねえ！」

「いやなに、ほんの些細なものですよ、ハヴローニヤ・ニキーフオロヴナ。うちの親爺は精進期ポストのあひだぢゆうに春蒔麦なら十五袋、稷きびの四袋、白麵麩きびの百個ぐらゐも貰ひました

かねえ。鶏も勘定をしたら、ものの五十羽とはありますまいし、玉子はおほかた腐つてるといふ始末ですよ。しかし、正直なはなし、ほんとに喜ばしい贈物といへば、ハヴローニヤ・ニキーフォロヴナ、ただあなたから頂くものの他にはありませんからね！」さう言つて祭司の息子は、甘つたるい眼つきで女を眺めながら、間近く擦りよつた。

「さあ、これがあなたに差しあげるあたしの贈物なんですよ、アフアナーシイ・イワーノキツチ！」さう言ひながら女は、卓子の上へ皿小鉢を出したり、さもうっかり外れてゐたといはんばかりに、上着の釦を掛けたりして、「肉入団子ワレーニキに、小麦粉ガルーシユキの煮団子ワレーニキに、それから\*パムプーシエチキと、\*トヴチエーニチキと！」

パムプーシエチキ 捏粉を煮た一種の食物。

トヴチエーニチキ 捏粉に肉を包んで油揚にしたもの。

「それあもう、これを、どんな御婦人がたより上手なお手際でおつくりになつたつてえことは、賭をしてもかまひませんよ！」さう言ひながら、祭司の息子は片手でトヴチエーニチキを取りあげ、片手で肉入団子ワレーニキを引きよせた。「しかし、ハヴローニヤ・ニキーフォロヴナ、わたしの胸はどんなパムプーシエチキやガルシーユキにも増してもつともつとおいしい御馳走が頂きたくつてギユウギユウいつてるのですよ。」

「さあ、このほかにどんな食べものがお望みなのか、あたしにはちよつと分りかねますわ、アファナーシイ・イワーノキツチ！」この肥つちよの別嬪は、いかにも臍に落ちないといった容ふり子をして、さう答へた。

「あなたの愛おなせけ情にきまつてるぢやありませんか、ハヴローニヤ・ニキーフォロヴナ！」かう囁やくやうに言ふと、祭司の息子は片手に肉入ワレーニキ団子を持つたまま、片手でがつしりした女のからだを抱きよせた。

「まあ、思ひがけない、何を仰つしやることやら、アファナーシイ・イワーノキツチ！」さう面映げにヒーヴリヤは眼を伏せて答へた。「ひよつとしたら、まだそのうへに接吻をなさるつもりなんでしょ！」

「それについて、これは自分自身のことですけれど思ひきつて白状しますがね、」と、祭司の息子が言葉をついだ。「あれはたしか、まだ神学校の寄宿にゐた頃のことなんですよ、今もまざまざと憶えてゐますが……。」

この時ふと、戸外そとで犬の吠える声と、門を叩く音が聞えた。ヒーヴリヤは急いで駈けだして行つたが、すぐに真まつさを蒼な顔で引つ返して来た。

「まあ、アファナーシイ・イワーノキツチ、大変なことになりましたよ。おほぜいの人が

門を叩いてゐますの、それに確か、この家の教父おやぢの声もするやうなんですの……。」

とたんに祭司の俸ワレーニキは肉入ワレーニキ団子を咽喉のどにつまらせてしまった……。彼の両の眼は、たつたいま幽霊のお見舞を受けたといはんばかりに、かつと剥きだしになつた。

「はやく、此処へあがつて下さい！」狼狽うろたへたヒーヴリヤは、天井のすぐ下のところに二本の横梁よこぎで支へられて、そのうへにいろんながらくた道具がいつぱい載せてある棚板を指さしながら叫んだ。

咄嗟の危急がわれらの主人公に勇氣を与へた。彼ははつと我れにかへると同時にペチカの寝レヂヤンカ棚へ飛びあがり、そこから用心しいしい棚板の上へ攀ぢのぼつた。一方ヒーヴリヤは、なほも烈しく、やつきになつて扉とを打ちたたたく音に急きたてられて、前後の弁へもなく門の方へ駈け出して行つた。

## 七

さあこれが奇々怪々な話なんでな、皆の衆！

——小露西亞喜劇より

市場では奇怪な事件が持ちあがつた。といふのは、何処か荷物のあひだから 赤い長スカー上衣トカが飛び出したといふ取沙汰でもちきりなのだ。輪麵麩プーブリキを売つてゐる婆さんのいふところでは、豚に化けた悪魔が、何か捜しものでもするやうに、ひつきりなしに荷馬車といふ荷馬車を片つぱしから覗きまはつてゐるのを見かけたとのことだ。この噂は忽ちのうち、もうひつそりと鎮まつた野營の隅々にまでひろまり、その輪麵麩プーブリキ売りの婆さんといへば、酒売り女の天幕とならんで屋台店を出してゐて、朝から晩まで用もないのにコクリコクリお辞儀をしたり、ふらつく足でまるで自分の甘い商売物そつくりの形を描いて歩くやうな女ではあつたけれど、人々はその話だけは信用しない方が罪悪だとすら考へた。搗てて加へて、例の郡書記が壊れかかつた納屋で見たといふ怪異が、尾鰭をつけてそれに結びつけられたため、夜に入ると共に人々は互ひにからだを擦りよせるやうにした。平和は破られ、怖ろしさのために夜の眼も合はぬといつたていたらく、そこで気の弱い連中だの、泊るべき家のある手合はそれぞれ引きあげることにした。チェレキークも、教父クームや娘とともに御多分にもれずその仲間だつたが、強つて彼等といつしよに家へつれて行つて泊

めてくれとせがむ連中を同道して、さては激しく門を打ち叩いてわれらのヒーヴリヤを周章狼狽させた次第である。神父クームはもう少々きこしめしてゐた。それは彼が荷馬車を曳いたまま二度も前庭にはを行きすぎてから、やうやく自分の家を見つけたことからみてもわかる。

客人たちも、みんなもう、ひどく上機嫌で、遠慮会釈もなく主人より先きに家のなかへづかづかと入りこんだものである。チエレエークの女かみさん房は、一同が家の隅々を穿鑿しだした時には、まったく針の塵に坐つてゐる思ひだつた。

「姐あねさん、どうしただね！」神父クームは家のなかへ入るなり声をかけた。「お前さんまだ瘡おこりをふるつてるだかね？」

「ええ、なんだか加減が悪いもんで。」さう答へながら、ヒーヴリヤは不安らしく天井の下の棚へ眼をやつた。

「おい、おつかあ、あすこの馬車から水筒を持つて来てくんなよ！」さう、神父クームはいつしよに戻つて来た自分の女房に伝ひつけた。「皆の衆といつしよに一杯やるだよ。あの忌々しい婆あどもめが、他人ひとにも話されねえくらゐおらたちを嚇かしやあがつただからなあ。まつたく、皆の衆、おらたちはくだらねえことで引きあげて来たもんぢやねえかね！」と、彼は土器の水呑みでグビグビやりながら語をついだ。「屹度あの婆あどもは、後でおらた

ちを嘲笑つてゐくさるだよ、でなかつたら、この場へ新らしい帽子を賭けてもええだ。よしんばまた、真実それが悪魔だつたにもしろだよ——悪魔がいつたいなんだい？ そやつのだたまへ唾でもひつかけてやるさ！ たつた今、現在この場へ、たとへばこのおいらの眼の前へ、奴が姿を現はしたとしてもだよ、おいらがもし、そやつドウリヤの鼻のさきへ馬鹿握ドウリヤを突きつけて呉れなかつたら、おいらは犬畜生だと言はれても文句はねえだよ！」

「それぢやあ、なんだつてお前さんは、急に顔いろを変へたりしただね？」と、お客の一人で、誰よりも頭だけぐらゐづぬけて背が高くて、いつも自分を勇者に見せよう見せようと心がけてゐる男が叫び出した。

「なに、おいらが？……勝手にしろい！ 何を寐とぼけてゐるだ？」

客たちはにやりと笑つた。口達者な勇者の顔にも北叟笑みが浮かんだ。

「なあに、この人だつて、今はもう青い顔なんぞするもんか！」と、他の一人が混ぜつかへした。「罌粟けしの花みてえな真紅な頬ほぺたをしてるでねえか。これぢやあこの人の名前は、ツイブーリヤ（玉葱）ではなくて、ブーリヤク（赤蕪）か、それとも、こねえに人を嚇おそかしやあがつた、あの 赤い長上衣スエートカ とでも言つた方がよかんべいに。」

水筒が卓子の上をひとまはりすると、お客一同は前にもましてひとときは陽気になつた。

この時、もう疾うから、その 赤い長上衣スエートカ のことで気をもみとほしで、東の間もその穿鑿スずきな心に落ちつきの得られなかつたチエレネークが、教父クームのそばへにじり寄つた。

「後生だからひとつ聴かせてくんよ、兄弟！ おらがいくら頼んでも、その忌々しいス長上衣ネートカ の由来を聞かせてくれねえんだよ。」

「おおさのう！ どうもその話を、よる夜なか話すのあ、ちつとべえ具合がよくねえだが、それでもお前や皆の衆の慰みになるちふことなら、（かう言ひながら、彼はお客の方へ向きなほつて）それにお客人たちも、どうやらお前めえとおなじやうに、その妖怪ばけもののはなしを聴きたがつてござるやうでもあるだから、ぢやあ、構ふことはねえや。ひとつ聴きなされ、かうなんだよ！」

そこで彼はちよつと肩を搔いて、着物の裾で顔を拭いてから、両手を卓子の上へのせて、やをら語りだした。

「何でもある時のこと、どういふ罪でか、そこんどこあ、からつきし分らねえだが、一匹の悪魔めが焦熱地獄からお払ひ箱になつたちふだのう……。」

「馬鹿なことを、兄弟！」と、チエレネークがそれを遮ぎつた。「どうしてそねえなことが出来るだよ、悪魔を地獄から追んだすなんてことがさ？」

「どうもかうもねえだよ、教父とつつあん？ 追んだしたもののあ追ん出しただ、百姓が家うちんなかから犬を追んだすとおんなじによ。おほかたその悪魔の野郎は、なんぞ善いことをしようつてな出来心を起しをつたのかもしんねえだよ、それで出て行けつちふことになつたのぢやらうのう。ところがその可哀さうな悪魔にやあ、どうにも地獄が恋しうて恋しうて、首でも縊りかねえほどふさぎこんでしまつただよ。だが、どうにもしやうがねえだ！

そこで憂さばらしに酒を喰くらひはじめをつたものさ。そうら、お前も見た、あの山蔭の納屋さ、今だにあの傍わきを通るにやあ、あらたかな十字架で、前もつて魔よけをしてからでなきやあ、誰ひとり近よる者もねえ、あの納屋を棲家にしをつてな、その悪魔の野郎め、若えもののなかにだつて滅多にやねえやうな、えれえ放蕩をおつぱじめたものだよ。もうなんぞといへば、朝から晩まで酒場に神輿みこしを据ゑてあくさつたちふことだ！……」

ここでまたしても、むつかしやのチエレークが語り手を遮ぎつた。

「兄弟、阿房なことを言ふもんでねえだ！ 悪魔を酒場のなかへ入れる馬鹿が何処の国にあるだ？ 都合のいいことにやあね、悪魔の手足にはちやんと鈎爪がついてるだよ、それに頭にやあ角が生えてるでねえか。」

「ところが、どうして、そこに抜ぬかりはねえつてことよ、ちやんと奴さん帽子をかぶり、手

袋をはめてゐくさつただもの。どうして見わけがつくもんけえ！ 飲んだの飲まねえのといつて、たうとうしめえにやあ、持つてゐただけ、きれいさつぱりと、残らずはたいしてしまやあがつただよ。長げえあひだ信用しとつた酒場の亭主も、やがてのことに信用しなくなつてのう。とどのつまり悪魔の奴め、自分の身に著けてゐた赤い長上衣スエートカをば、せいぜい値段の三が一そこそこで、その当時ソロチンツイの定期市に酒場を出してゐた猶太人のところへ飲代のみしろの抵当かたにおくやうな羽目になつただよ。抵当かたにおいて、さて猶太人に向つて、いかえ猶太ジユウ、おいらはかつきり一年たつたら、この長上衣スエートカを請け出しに来るだから、それまでちゃんとしまつといて呉んろよ！ —— さう言つておいて掻き消すやうに姿を隠してしまつただ。猶太人がよくよくその長上衣スエートカを見てえと、生地はととてもともミルゴロド界限で手に入るやうな代物ではなく、そのまた赤い緋の色がまるで燃えたつやうで、じつと見つめちやあるられねえくらゐ！ ところが猶太人め、期限になるまで待つてをるのが惜しくなつただのう。畜生め鬢髪ペーシキを撫で撫で、さる旅の旦那衆にそれをうまく押しつけて、五\*チエルヤーネツはたつぷりせしめやあがつただよ。約束の日限なんぞ、猶太ジユウの野郎すつかり忘れ果ててしまつてゐただ。ところが、ある日の夕方のこと、一人の男が入えつて来て、さあ、猶太ジユウ、おいらの長上衣スエートカを返してもらはう！ つて言ふだよ。猶太ジユウ

奴め<sup>ユウ</sup>最初はまったく見憶えがなかつたが、よくよく見ればくだんの男なので、てんから思ひもよらぬといった顔つきをしやあがつて、それあまた、どんな長上衣<sup>スエートカ</sup>のことですかね？ 手前どもには長上衣<sup>スエートカ</sup>なんてものあ一つもありましねえだ！ てんでお前さまの長上衣<sup>スエートカ</sup>なんて知りましねえだよ！ と、空とぼけて見せをつたものさ。するてえと、男はフイと出て行つてしまつただよ。ところが、やんがて夜になつて、猶奴<sup>ジユウ</sup>のやつが自分の荒<sup>あば</sup>ら家の戸を閉めきつて、長持の中の錢を一とほり勘定し終つてから、上掛けをかぶつて、猶太流に祈祷をはじめをつたと思ひなされ——何か物音がするだよ……ひよいと見ると——窓といふ窓から、豚の鼻づらがうちん中を覗き込んでるでねえか……。」

チエルローネツ 彼得一世時代に制定された金貨の単位。

この時ほんとに、何かはつきりはしないが、とても豚の啼き声に似た音が聞えた。一座の者ははつと顔いろを変へた……。語り手の面上には冷汗の玉が吹き出した。

「なんだろう？」と、胆をつぶしたチエレキークが口をはさんだ。

「なんでもねえだよ！……。」さう答へながら、<sup>クーム</sup>教父はからだちゆうをガタガタ顫はせてゐる。

「ええつ！」客の一人がさう口走つた。

「お前さんがいつただんべ？」

「いんにや！」

「いつたい誰が鼻を鳴らしただ？……」

「馬鹿々々しいつたら、何をおれたちやあ大騒ぎしてるだ！ ビクつくこたあ、なんにもありやしねえやな！」

それでも、一回はびくびくして、あたりを見まはしたり、部屋の隅々へ眼をくばったりしはじめた。ヒーヴリヤはまるで生きた心地もなかつた。「まあ、ほんとお前さんたちは女つ子<sup>あまこ</sup>だよ、まるで女つ子だよ！」と、彼女は大声をあげて喚いた。「お前さんたちが男一匹で、哥薩克の働らきが出来ようなんて、とても思ひもよらないよ！ お前さんたちにやあ、紡錘<sup>つむむ</sup>を持つて糸車のまへに坐るくらゐが分相応だよ！ あれあ屹度、何だよ、誰かがお尻<sup>なら</sup>をしたのか……それとも誰かのお尻の下で腰掛<sup>こし</sup>が鳴つただけのことさ。それなのに、みんな狂<sup>きちがひ</sup>人<sup>ひと</sup>みたいに跳びあがるなんて！」

この言葉にわれらの勇士たちは気恥かしくなつて、強ひて空元氣をつけた。そこで教父は水筒から一口あふつて、またもや続きを話しはじめた。「ところで、その猶奴<sup>ジユウ</sup>は氣を失つてしまつただよ。だが、豚どもは竹馬<sup>タケウマ</sup>みたいにひよろ長い脚で窓を跨いで中へ入えると、

いきなり、三本縶よじの革鞭を振りあげて、あの横梁よこぎよりも高く猶奴ジュウが跳ねあがつたくれえ、こつびどく野郎を擲りつけて正気に戻しただ。するてえと、猶奴ジュウのやつめ、這ひつくばつて何もかも白状してしまつただよ……。だが、長上衣スエートカをさつそく取り返すつてえ訳にやあ行かなかつただ。なんでも道中でその旦那衆からジブシイが長上衣スエートカを盗んで、それを女商人に売りつけをつただ。そのまた女商人がそれを持つてこのソロチンツイの定期市ヤールマルカへやつて来たちふ訳だが、それ以来、その女商人の商品しながさつぱり捌けなくなつてしまつただよ。だもんで女商人はひどくそれを不思議に思つただが、やがてそれが何もかも、てつきりその赤い長上衣スエートカのせゐだと気がついただ。成程さういへば、それを著るてえと妙にからだが緊めつけられるやうな気がするだよ。そこで前後の考へもなく、いきなりそれを火のなかへおつ抛りこんだだが、その魔性の着物は燃えもしねえだ！…… ええ、こりや飛んでもねえ悪魔のお土産だ！ つてんでな、女商人はいろいろと思案にくれた挙句、バタを売りに来てゐた或る百姓の荷馬車へそれをこつそり押しこんだだよ。頓馬な百姓め、ほくほくもので悦に入りをつただが、売りもののバタはからつきし、値踏みひとつする者もねえ始末さ。 ええ、忌々しい、この長上衣スエートカは悪魔の手からわたつたものに違えねえ！ さう言ひざま、斧を取つて、それをばズタズタに截りきぎんでしまつただよ。ところ

がどうだ、その一切れ一切れが寄りあつまつて、またぞろもとのやうに、ちやんとした長<sup>ス</sup>キートカ  
 上衣になるでねえか！　そこで今度は十字を切つて、もう一度それを斧で断ちきつて、  
 その切れつばしを、どここなしに撒きちらしておいて行つてしまつただよ。その時から  
 こつち、毎年、定期市<sup>ヤールマルカ</sup>の時分になるてえと、きまつて豚の仮面<sup>めん</sup>をかぶつた悪魔めが、広  
 場々々をほつつきまはつて、鼻を鳴らしながら、自分の長上衣<sup>スキートカ</sup>の切れつばしを拾ひあつ  
 めて歩くつてえだ。なんでも、今ぢやあ、もう左の袖口だけが目つからねえばかりだつ  
 てえこんだ。それからこつち、誰ひとり怖気をふるつて近寄らねえもんで、ここに定期<sup>ヤールマ</sup>  
 市<sup>ルカ</sup>が立たねえやうになつてから、かれこれももう十年にもなるべえ。なのに、その悪魔め  
 が、今度はあの委員の野郎を抱きこみやあがつて……」

かう言ひかけた言葉の半ばが語り手の唇のうへで消えてしまつた——窓が騒々しく打ち  
 叩かれて、硝子が唸りを立ててけし飛んだ。そして物凄い醜<sup>しこづら</sup>面<sup>めん</sup>が、そこからゆつとば  
 かりに中を覗きこんで、まるで 皆の衆、いつたいここで何をしてゐなさるだね？　とで  
 も訊ねるやうに、じろじろと眺めまはした。

……犬のやうに尻尾を巻き、カインのやうにわななきながら、  
鼻の孔から鼻水みづをたらした。

——コトウリヤレフスキイ『エニエイダー』より——

家のなかにもた者はみんな恐怖に打たれてしまった。教父クームは口をぼかんとあけたまま、まるで化石したやうにからだを硬ばらせてしまった。両の眼は今にも飛び出しさうなくなる、かつと見開かれ、指をひろげた両手は宙に浮いたままビクとも動かなかつた。例の長の身の勇士つぼが、驚愕のあまり天井へ跳ねあがつて、横梁よこぎを頭で小突き上げたため、柵板が外れて、ガラガラつと物凄い音を立てざま、祭司の息子が地面したへ転げ落ちてきた。

「ひやあつ！」と絶望的にわめいて一人の男は、怖ろしさのあまり腰掛の上へ打つ伏しになつて、両手と両足でそれにしがみついた。

「助けてくれえつ！」さう喚いて他の一人は、頭から外套をひつかぶつた。

再度の驚愕でやうやく我れに返つた教父は、わなわなと顫へながら女房の裾のしたへ潜りこんだ。長身の勇士は狭い焚口から無理やりに燠炉ペチカのなかへ這ひこむなり、自分で焚口の扉を閉めてしまった。チエレキークはといふと、まるで熱湯でもぶつかけられたもののやうに、帽子の代りに甕を頭にかぶつて、戸口へ駈け出すなり、狂人のやうに、ろくろく足もとも見ずに往来をひた走りに走つたが、やうやく疲労のために駈ける足の速力がゆるんで来た。彼の心臓はまるで磨粉場こなひきばの白のやうに激しくうち、汗が玉をなして流れた。疲れはてて、今にも地面へぶつ倒れさうになつた時、ふと彼の耳に、誰か後ろから追つてくるらしい蹙音が聞えた……。彼の息の根はとまつてしまつた……。

「悪魔だ！　悪魔だ！」と、彼は氣を失ひながらも精いつばいに叫んだが、一瞬の後には、知覺を失つて地上へぶつ倒れてしまつた。

「悪魔だ！　悪魔だ！」さういふ声が彼の後ろの方でも聞えた。そして彼は何ものかがけたたましく自分に襲ひかかつたやうにだけは感じたが、ここで彼の記憶の糸はとぎれて、窮屈な棺桶のなかの不気味な佳人のやうにおし黙り、そのままビクとも動かずに路の真中にのびてしまつた。

## 九

前から見ればともかくも、

後ろ姿は、あれ、鬼だ！

——民話の中より——

「なあ、ウラース！」と、往来に寝てゐた連中の一人が、真夜なかに頭をもちあげて言った。「おいらの近くで誰だか、悪魔だあつて叫んだでねえか！」

「おらになんの関係があるだ？」傍に寝てゐたジプシイが、伸びをしながら呟やいた。

「よしんば、洗ひざらひ身うちの者の名を呼んだにしたらがさ！」

「だけんど、なんだか咽喉を締めつけられるやうな声だつたでねえか！」

「人が寝言に何をいふか知れたもんでねえつてことよ！」

「それあともかく、ちよつと見て来るだけでも見て来てやらにやあ。おめえ一つ火を燧うつてくんよ！」

片方のジプシイはぶつくさ言ひながら立ちあがつて、二度ばかり稲妻のやうな火花を浴

びると、口をとんがらして火口ほくちを吹いてゐたが、やがてカガニエーツ——それは陶器のかけらに羊の脂をたたへたもので、小露西亞では普通一般の燈火である——を手にして、道を照らしながら歩き出した。

「ちよつと待つた！ ここになんだかうづくまつてるだよ。燈火あかりをこつちい見せろよ！」

この時、また幾人かの連中が彼等に加はつた。

「何がうづくまつてるだよ、ウラース？」

「なんでも人間が二人らしいだが、一人が上に乗つかつて、一人が下になつてるだ。はあてな、どつちが悪魔だか、見当がつかねえだよ！」

「そいで、上に乗つてるなあ、なんだい？」

「女おんなあだ！」

「そいちやあ、そいつがてつきり悪魔だんべや！」

どつと一時に哄笑が往還に轟ろきわたつた。

「女おんなあが人の上に乗つかつてるからにやあ、この女おんなあめ、てつきり人を乗りまはす術てを知つてるにちげえねえだよ！」と、輪になつてゐた群衆の中の一人が言つた。

「おい、みんな見ろやい！」と、別の一人が甕の破片われを手に取りあげながら言つた。その

甕の残りの半分だけがチエレキークの頭に被さつてゐるのだつた。「なんちふ帽子しやつぽをこの大将はかぶつてやあがるんだい！」

騒ぎの音と笑ひ声が大きくなつたため、それまで気を失つてゐたソロローパイとその女房は息を吹き返したが、さつきの驚愕からまだ醒めきらぬ二人は、長いあひだ、きよとんとした眼でおどおどと、浅黒いジプシイたちの顔を見つめてゐた。ほの暗く、顫へながら燃える灯火あかりに照らし出されたジプシイたちの顔は、夜ふけの闇のなかに、さながら陰惨な地底の水蒸気につつまれた奇怪な魍魎やうりやうのつどひかとも思はれるのであつた。

## 十

桑原々々！

悪魔のそそのかしだ。

——小露西亜喜劇より——

すがすがしい朝風が目覚めたばかりのソロチンツイの上を吹きわたつた。どの煙突から

も煙の渦が日の出を迎へにたちのぼつた。市場はがやがやとぎわめき出した。羊や馬が嘶きはじめ、鷺鳥や女商人の喚き声が再び市場ちゆうにひろがつた——そして不気味な夜明け前にあんなに人々を怯えあがらせた、くだんの 赤い長上衣スチートカの怖ろしい取沙汰シも黎明のめの光りと共に消え失せた。

欠びをしたり、伸びをしたりしながら、チエレキークは教父の家の藁葺の納屋で、去勢牛だの麦粉や小麦の袋のあひだにはさまつて、うつらうつらと夢路をたどつてゐた。が、その快い夢見心地から目醒めようなどは、てんで思ひもかけぬもののやうであつた。ところが不意に、よく耳馴れて、あたかも彼が密かに懶惰に耽る自分の家の楽しい煖炉レジャンカ棚か、それともわが家の敷居からもの十歩とあしとは離れてゐない、遠縁の者の開いてゐる居酒屋とおなじぐらゐ、彼に馴染の聲が耳にはいつた。

「いい加減にお起きよ、お前さん、お起きつたらさ！」と、その耳もとで嗶がれ声を張りあげながら、優しい奥方が力いつぱい、彼の手をひつぱつた。

チエレキークは返辞をする代りに頬ぺたを膨らまして、両手で太鼓を打つ真似ごとをおつぱじめた。

「きちがひ！」と叫んで、女房は、あやふく自分の顔をひつぱたきさうな亭主の手から身

を退いた。

チエレキークは起きあがると、ちよつと眼をこすつて、あたりを見まはした。

「なあ、おつかあ、正真正銘、嘘いつはりのねえ話だが、おめえのその御面相が太鼓に見えてさ、おいらがその太鼓で朝の時刻ときを打たにやあなんねえことになつてよ、そうら、あの教父の話した、ぺてん師を豚面どもが何したとおんなじやうに、その……。」

「もうたくさんだよ、そんな阿呆ぐちを叩くのはよしとくれ！ さあさあ、早く牝馬を売りに行くんだよ。ほんとに、いい笑はれもんだよ、定期市ヤールマルカへ出かけて来て、苧麻ひと握りよう売らないなんて……。」

「だつてさ、おつかあ！」と、ソローピイがすぐにその口尻をうけて言つた。「屹度、おいらをみんなが笑はあな。」

「さあさあ、おいでなさいつたら！ あんなことはなくたつて、どうせお前さんは笑はれものなのさ！」

「だつて、おめえ、おいらがまだ顔も洗つてゐねえことは分つてゐべえ。」さういひながらもチエレキークは、欠びをしたり、背中をボリボリ搔いたりして、さうしてゐる間だけでも怠ける時間を引きのばさうとするのであつた。

「おやおや、とんでもない時に、清潔きれいすぎな気まぐれを起したもんだよ！ つひぞお前さんが顔なんか洗つたためしがありますかね？ そら、手拭をあげますよ、これでその御面相を撫でまはしておけばいいでしょ。」

かう言つて彼女は何か巻きかためたものを手に取つたが——ぎよつとして、それから手を振りはなした。それは 赤い長スエードカ上衣の袖口 だつたのだ！

「さつさと出かけて行つて、商売をしていらつしやいつたらさ！」と、自分の亭主が怖ろしさのあまり腰を抜かして、齒をガタガタ鳴らしてゐるのを見ると、彼女はやつと氣を取りなほして言つた。

もう商あきなひ売もあがつたりだんべえ！ かうひとりごとを言ひながら、彼は牝馬の手綱をほどいて広場へ曳きだした。ほんに、さういへば、この忌々しい定期市ヤールマルカへ出かける時だつて、何だか牛の死骸でも背負はされたやうな重つ苦しい氣持がしただて。それに去勢ぬき牛どもめが二度ばかり家の方へ後もどりをしかけやがつた。それから、どうも今になつて考げえて見ると、おいらは月曜日に家を出たやうだぞ。なるほど、それがそもそもよくなかつただ！……忌々しい、性懲りもねえ悪魔の野郎めが、片つぼうくれえ袖口がなくなつてよかりさうなもんだに、しやうもねえ、なんの罪つみが科もない人間を騒がせやあがるだ。

仮りにおいらがその悪魔だとしたら——あつ、鶴亀々々！——そんな碌でもない檻褻つきれなんぞ探しに、よる夜なかうろつきまはるなんて馬鹿な真似をするかしらんで？

この時、われらのチエレキークの推理の糸は突然、ふとい頓狂な声のために断ちきられた。彼の眼の前には背の高いジプシイが突つ立つてゐた。

「いつたい何を売りなさるだね、お前めえさんは？」

売り手は口をつぐんだまま、相手を、足の爪先から頭の天辺まで、じろりと眺めただけで、歩みを止めようともせず、手綱をしつかり手ばなさないやうにしながら、落ちつきはらつた顔つきで、かう答へたものだ。

「おいらが何を売るだか、自分の眼で見たらよかんべえ！」

「革紐を売りなさるだかね？」と、ジプシイは、チエレキークの握つてゐる手綱を見ながら訊ねた。

「さうさな、牝馬が革紐に似とるやうなら革紐としておくべえか。」

「それでも、をかしいやね、お前めえさん、それにやあ、どうやら麦藁めえばかり食はせなすつたと見えるだね？」

「麦藁めえばかり食はせたと？」

茲でチエレキークは手飼ひの牝馬を突きつけて、この恥知らずな誹謗者の鼻をあかせてくれようものと、手綱をぐつと曳かうとしたが、しかし意外にも手応へがなくて、彼の手ははずみを喰つて頤へぶつかつた。見れば、手にあるのは断ち切られた手綱だけで、しかもその手綱には——おお怖ろしや、彼の髪の毛は一時に逆立つた！—— 赤い長上衣スカーツカの袖口のきれつばしが結びつけてあるではないか！……べつと唾を吐いて、急いで十字を切ると共に、両手を泳ぐやうに振りながら、その思ひもかけぬ土産物から逃れようとして、彼は一目散に駈け出したが、その速いこと速いこと、血気の若者そこ退けといつた歩調あしなみで忽ち群集のあひだへ姿を消してしまつた。

## 十一

わが麦のことで他人に打たれる。

—— 諺 ——

「とつ捉まへろ！ そいつをとつ捉まへろ！」と数人の若者が狭い町はづれで呶鳴つた。

そして気がつくと、チエレキークは不意に頑丈な手で取り押へられてゐた。

「こいつを縛りあげるんだ！ てつきりこいつめが、堅気な人間の牝馬を盗みやあがつたんだよ。」

「とんでもねえ！ なんだつておいらを縛るだね？」

「あべこべにこいつの方から訊いてやがらあ！ それぢやあ、なんだつて手前は、この定ヤ期市ルマルカへやつて来てゐる百姓のチエレキークの牝馬を盗みやあがつたんだ？」

「お前さんがたは気でも狂つただかね、若い衆たち！ どの国にわれとわが物を盗む阿呆があるだ？」

「古い手だよ！ 古い手だよ！ ぢやあ、なんだつて手前はまるで自分の踵へ悪魔が追ひつきかかりでもしたやうに、矢鱈無性に逃げ出しやあがつたんだ？」

「逃げもせにやあなるめえて、悪魔の着物が……。」

「ええ、こいつめ！ その手でおいらを誤魔化さうたつて駄目だぞ。待つてろ、今に委員から二度と再びそんなペテンで人を驚かせないやうに、きつと成敗があるから。」

「とつ捉まへろ！ そいつをとつ捉まへるんだ！」さういふ叫び声が反対がはの町端れであがつた。「そうら、そこへ逃げてゆくぞ！」

やがて、我がチエレキークの眼前へ、後ろ手にいましめられて、数名の若者に引つ立てられた、見るも痛ましい教父クームの姿が現はれた。

「稀けつたい代なこともあるものさ！」と、そのなかの一人が言った。「この、ひと目で泥棒だと分る悪党の言ひ草を聴いてくれ。どうして狂きちがひ人みてえに突つ走つたんだと訊ねると、その答へがかうだ——『嗅煙草を喫はうと思つて衣囊かふしへ手突つこんだら、嗅煙草入の代りに、悪魔スホートカの長上衣のきれつぽしが出てきて、そいつが赤い焰をあげて燃えあがつたから、後をも見ずに駈けだしたんだ』とき！」

「おやおや！ さては、こ奴ら二人は、てつきりひとつ穴の狐に違えねえぞ！ 両方いつしよに繋いでおくことにしよう。」

## 十二

なんで、あなた方はかう私を責めなさるんで？

どうしてこんなにいちめなさるんで？ と哀れな彼が言った。

何をそんなにこの私をからかひなさるんで？

ええ何を、何を？ さういつて、ぼろぼろと苦い涙をこぼしながら、手を拱ぬいた。

——\*アルテモフスキイ・グラーク『且  
那と犬』より——

アルテモフスキイ・グラーク ピョートル・ペトローフ (1791—1853) 小露西亜  
の詩人。

「ひよつと、どうかして、お前<sup>めえ</sup>、ほんとになんぞちよろまかしたんぢやあねえかい？」かう、教父と一緒に繋がれて、藁葺き小舎の中で横になつたまま、チエレキ<sup>チ</sup>が訊ねた。

「お前<sup>めえ</sup>までがそんなことを言ふのかい、兄弟？ お袋の眼を盗んで、酸<sup>スメターナ</sup>乳脂<sup>ワ</sup>をつけた肉<sup>ワ</sup>入<sup>レニキ</sup>団子<sup>キ</sup>を摘んだことよりほかに——それもおいらが十歳<sup>とうを</sup>ぐれえの時の話だが——それよりほかに、つひぞ他人<sup>ひと</sup>さまの物に手をかけたことがあつたら、この手足が干からびてしまつてもええだよ。」

「ぢやあ、なんだつておれたちあこんな酷い目に会ふだね？ お前はまだしものことよ、ともかく他人<sup>ひと</sup>の物を盗つたつちふ言ひがかりを受けとるだから。ところが、おいらくれえ

不合せな者があるだらうか、われとわが牝馬を盗んだなんちふ性の悪い言ひがかりをされてさ？ 屹度これあ、なんでも前の世からの因果で、こんな不運な憂目を見ることだべえなあ！」

「情けねえことぢや、まつたくみじめな、頼りない身の上ぢやよ！」

かういつて教父同士は、めそめそと啜りあげて泣きだした。

「これあまた、どうしたといふだね、ソローパイのお父つあん？」と、ちやうどその時そこへ入つて来た、グルイツイコが声をかけた。「いつたい、どいつがお前さんを縛つたんだね？」

「あつ！ ゴロブペンコだ、ゴロブペンコだ！」と、ソローパイは嬉しさのあまり叫び出した。「おい、兄弟、これが、そら、お前に話したあの当人だよ。それあ見もののだぞ！ お前の頭よりでつかいくれえのコツプを、おらの眼のまへで顔ひとつ顰めねえで呑み乾しただもの。それが嘘だつたら、この場でおいらに天罰が降る筈だ！」

「ぢやあ、兄弟、なんだつて、お前はそねえな素晴らしい若い衆に恥いがかしただ？」

「この態あ見てくんない。」さう、チエレキークはグルイツイコの方へ向きなほつて言葉をつづけた。「てつきり、お前に恥いがかした罰が当たただよ。どうか勘弁してくんな！」

どこまでもおらはお前の肩さ持ちたかつただが……。けんど、どうしやうがあるだ？ 婆あの肚のなかには悪魔が巣くうてゐるだもん。」

「そんなことあ、おいら、根に持つてやしねえだよ、ソローパイのお父とつあん！ なんならからだ軀を自由にしてあげるぜ！」

そこで彼は見張りの若者たちにめくばせをした。すると彼等は逸速くいましめの縄を解きにかかつた。

「そのかはり、ちゃんと婚礼の運びにして貰はうぜ！ さうして\*ゴパツクでまる一年も足の痛えほど、うんと一つ騒ぐことにさ！」

ゴパツク ウクライナ農民の間に行はれる代表的な舞踏の一種。

「願つたり叶つたりだよ！」ソローパイはぽんと手を叩いて答へた。「ああ、ほんとに今おいらはいい気持だ、まるで人買ひがうちの婆あを引つ浚つて行つて呉れでもしたやうにさ！ なあに、かれこれ考へることあねえだよ！ 善からうが悪からうが構ふこつてねえだ——けふぢゆうに婚礼を挙げつちまやあ、なんてつたつて後の祭りだあな！」

「ぢやあ、屹度だぜ、ソローパイのお父とつあん。一時間もしたらお前さんとこへ行くだけか  
らね。まあ、急いで帰りなすつた方がいいぜ。あつちでお前めえさんの牝馬や小麦の買ひ手が

待つてる筈だからさ！」

「なんだと、牝馬が見つかったちふだか？」

「見つかったとも！」

去り行くグレイツイコの後ろ姿を見送りながら、チエレキークは、あまりの嬉しさにしばし棒だちになつてたたずんでゐた。

「どうだね、グレイツイコ、おいらがりうりうの細工はまづかつたかね？」さう、くだんの背の高いジプシイが、途を急ぐ若者に向つて声をかけた。「去勢牛きんぬきはもうおいらのものだらう？」

「手前てめえのもんだよ！ 手前てめえのもんだよ！」

十三

何も怖がることはない、

赤い上靴はいたなら、

可愛いお前のその足で

踏んづけさんせ仇きをば

お前の靴の踵そこがね鉄が

鳴りひびくほど！

その敵が

鳴りをしづめてしまふほど！

——婚礼唄——

ひとり家うちの中に坐つたまま、パラスカはその美しい頤に肘杖をついて、物思ひに沈んでゐた。さまざまな空想が亜麻いろの頭のぐるりを旋してゐた。時々、ほのかな微笑が不意に、その紅いろの唇に浮かんで、何やら喜ばしい思ひが黒い眉をもたげるのであつたが、時にはまた憂への雲がそれを鳶色の澄んだ眼の上へおしぎげた。

もしや、あのひとの言ふやうな上々の首尾にいかなかつたら、どうしようかしら？ 彼女は何かしら疑念の色を浮かべながら、かう呟つぶやいた。もしや、あたしをお嫁にやつてくれなかつたら、どうしよう？ もしか……。ううん、そんなことつてあるものか！ 義お母つかさんだつて自分の好きな真似をしてるんだもの、あたしだつて、かうと思ひ立つたこと

をして退けて悪いわけはない筈よ。強情のはりつくらなら負けやしないわ。あのひと、ほんとに好男子いいをとこだわ！ あのひとの黒い眸が、なんて美しく輝やくことだらう！ あのひとの口からもれる『可愛いパラシユ！』つていふ言葉の優しさ！ あのひとには、あの白い長上衣スエーデンコートがとてもよく似あふわ！ 帯がもう少し派手だつたら、もつと好いんだけれど！……いいわ、今にあたしたちがほんとに新らしく家を持つやうになりさへすれば、あたしが織つてあげるから。まあ、思つただけでもぞくぞくするわ！ さう言いながらも彼女は、市いちで自分に買った、赤い紙で縁を貼つた小さな鏡を懐ろから取りだすと、秘やかな喜びをもつてそれを覗きこんだものだ。さうなつたら、あたし、どこで義母おつかさんにくはさうが、間違つても挨拶なんかしてやらないから。どんなに猛らうが狂はうがかまやしない。さうだとも、ねえ義母おつかさん、いくらあんただつて、もう自分の継娘をひつぱりたいたりなんか出来ないことよ！ あたしや、砂が石の上で芽をふくことがあつたつて、樫の木が枝垂柳のやうに水ん中へお辞儀をつくことがあつたつて、決してあんたの前へ頭はさげないことよ！ あら、さうさう忘れてゐたわ……頭巾帽アチーボツクをかぶつて見なきやあ、義母おつかさんのでも、どうにかあたしに間にあふかしら？

そこで彼女は鏡を両手で持つたまま立ちあがると、俯むいてそれを覗きこみながら、こ

ろびはしないかと危ぶむやうな、おつかなびつくりの歩調あしどりで、床ではなく、昨夜あの祭司の息子が真逆様にころげ落ちた、くだんの板の取りつけられた天井や、壺の並べてある棚を眼下に見おろしながら、部屋のかなかを歩きまはるのであつた。

ほんとに、あたしつたら、まるで赤ん坊だわ。さう、笑ひながら彼女は眩やいた。足を踏みだすのが怖いなんて！

やがて彼女は足拍子を取りはじめると——だんだん大胆になつて、たうとう終ひには左手を鏡からはなして腰にあて、靴の踵そこがね鉄かねの音も高らかに、鏡を片手で前にささへたまま、好きな自分の唄を口吟くちずきみながら踊りだした。

青い青い蔓つるにち雁にち来は

低くさがつて床になれ！

眉毛の黒い、好いひとは

こつちいちよいとお寄んなさい！

青い青い蔓つるにち雁にち来は

もつとさがつて床になれ！

眉毛の黒い、好いひとは

もつとこつちいお寄んなさい！

ちやうどその時、チエレキークが戸口へ近よつたが、わが娘が鏡を覗きながら、しきりに踊つてゐるのを見て、その場に足を停めた。つひぞない娘の気紛れに嘖きだしながら、暫らくはそれに見惚れてゐたが、すっかり夢中になつてゐる娘はなんの気もつかぬらしい様子だつた。ところが、懐かしい歌の調べを耳にするとチエレキークの胸の血がさわぎだして、やをら誇りかに両手を腰につがへて前へ進み出るなり、彼は前後を忘れてしやがみ踊りをおつ始めたものだ。その時、からからといふ教父の高笑ひが二人をぎよつと震ひあがらせた。

「いや、結構々々、こんなところで親爺と娘が婚礼の前祝ひをやらかしてゐるだな！ さあ、早く来るだよ、聶殿がござつただから。」

この最後のひと言にパラースカは、自分の頭に束ねられたリボンの色よりも濃く、頬を赧らめたが、暢気な父親もやうやく自分の帰宅した用件を思ひだした。

「さあ、娘、急いで出かけるだよ！ ヒーヴリヤの奴め、おいらが牝馬を売つたら、大喜

びで飛んで行きをつただよ。」さう言ひながらも、彼は不安さうにあたりを見まはした。

「下<sup>ブラフタ</sup>着だの、いろんな布地だのをしこたま買ひこむつもりで駈け出して行きをつただから、彼女の戻つて来ねえうちに、何もかも鼻をつけてしまはにやなんねえだよ！」

パラースカは家の閾を跨ぐがはやいか、自分のからだ<sup>スカートカ</sup>が白い長上衣<sup>スカーツカ</sup>を著た若者の腕に抱きすくめられたのを感じた。彼はおほぜいの人だからといつしよに、往來<sup>おもて</sup>で彼女を待ち受けてゐたのであつた。

「主よ、祝福を垂れ給へ！」と、チエレキークが二人の頭の上に手を置いて言つた。「この二人が、とも白髪<sup>ハゲ</sup>の末まで、幾ひさしく添ひとげまするやうに！」

この時、群衆の中にざわめきが起つた。

「どうしてどうして、滅多にそんなことをさせて堪るもんか！」かう、ソローピイの配偶<sup>つれ</sup>者が躍起になつて喚きたてたが、群らがる人々がげらげら笑ひながら、後ろへ後ろへと彼女を押し戻した。

「逆せあがるでねえだよ、逆せあがるでねえだよ！ おつかあ！」とチエレキークは、頑丈なジプシイが二人がかりで女房の両腕を押へてゐるのを見て、いやに落ちつき払つて言ふのだつた。

「いつたん出来てしまつたこたあ、どうもしやうがねえだよ。変改へんがへするつてことあ、おら大嫌えだで！」

「いけないつたら、いけないよ！ そんな勝手な真似をさせてなるもんか！」と、ヒーヴリヤはなほも喚き立てたが、誰ひとりそれに取りあふものはなかつた。幾組もの男女が新郎新婦をとりかこんで、二人のぐるりに蟻の這ひ出る隙もない舞踏の壁を作つてしまつた。

粗羅紗の長上衣を著て長い振ねぢれた泥鱗髭をはやした樂師きゆうが弓を一触するや、一同の者が否応なしに、一斉に調子をそろへて踊り出す、その光景を眺めては、なんとも形容しがたい一種不可解な感に打たれざるを得なかつた。恐らく生涯に一度もその氣むづかしい顔に笑ひを浮かべたことのなささうな連中までが、足拍子を取つたり、肩をゆすぶるのであつた。誰も彼もがゆらゆらと揺れながら、踊りまはつた。しかし、古ぼけた顔に墓場のやうなそつけなさを表はした老婆たちが、若い、喜々として笑ひ興ずる、元氣澆刺たる人々のあひだに揉まれてゐる有様を一瞥したなら、更に奇妙で一層合点のゆかぬ思ひが心の奥底に湧きたつたであらう。まことにたわいもない老婆たちだ！ 子供らしい喜びもなければ、同感の閃めきもなく、ただ酒の力がまるで魂のない自動人形を操る機械師のやうに、彼女たちに人間らしい動作を強ひてゐるだけで、ふらふらと酔ひしれた頭を振り動かしながら、







## 青空文庫情報

底本：「デイカーニカ近郷夜話 前篇」岩波文庫、岩波書店

1937（昭和12）年7月30日第1刷発行

1994（平成6）年10月6日第8刷発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本の中扉には「デイカーニカ近郷夜話 前篇」の表記の左下に「蜜蜂飼ルードウイ・パニコー著はすところの物語集」と小書きされています。

※副題は底本では、「\*」#「\*」は行右小書き」ソロチンツイの定期市《ヤールマルカ》」となっています。

※副題の「ソロチンツイ」に、底本では「ポルタワ県ミルゴロド郡下の町。ゴーゴリの生まれたところ。」という訳注が付けられています。

※「灯」と「燈」は新旧関係にあるので「灯」に書き替えるべきですが、底本で混在していましたので底本通りにしました。

入力：oterudon

校正：伊藤時也

2009年8月6日作成

2014年6月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ディカーニカ近郷夜話 前篇

VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 ソロチンツイの定期市

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>